

計画12	4件(6名)	3件(5名)
18	2件(4名)	2件(4名)
自由	25件(48名)	18件(24名)
資料	8件(16名)	17件(37名)

(3) 研究会

昭和62年度は、「研究会」と小規模の「ミニ研究会」が以下のとおり採択・実施された。

A. 研究会

1. 分布限界域におけるニホンザルの生息環境と個体群動態

2. 第17回ホミニゼーション研究会

B. ミニ研究会

1. ヒト・チンパンジー・コンピュータにおける推論機能について
2. 霊長類の情報受容と脳内伝達機構
3. ニホンザルの地域変異
4. ニホンザル集団における優劣・順位の再検討

2. 研究成果

A. 計画研究

課題 1

飛騨山系槍ヶ岳周辺に生息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之(マカク研究会)

1987年度には、無雪期を中心に、4~10月の間に長期にわたる調査を実施した。

無雪期の遊動の中心となる高所(標高2,000 m以上のエリア)へ群れが移動し、東鎌尾根へはじめて出現したのは6月上旬であった。この頃の群れの遊動の中心は高瀬川上流の天上沢流域から東鎌尾根、西岳への斜面で、東鎌尾根(最低鞍部は2,500 m)を越え、槍沢側へのはじめての出現は6月下旬であった。さらに南側の天狗原への出現を確認したのは7月8日であった。8月にかけて、槍沢側の利用頻度は例年に比べて低かったが、9月から10月にかけては、東鎌尾根から西岳を結ぶ

ラインから南側の槍沢側、天狗原にかけての2,200 mから2,800 mの範囲を主に利用し、この状況は10月下旬まで続いた。

槍ヶ岳から東鎌尾根をへて西岳にかけては、大小の2群(それぞれY, Nとよぶ)を観察できるが、8,9,10の3カ月はそれぞれ10日以上長期調査を実施し、群れの追跡を試みたが、地形、気象条件等多くの悪条件のもとで、群れの発見後も満足な追跡はできず調査は難航をきわめた。しかし、10月1日、ヒュッテ西岳前でY(槍ヶ岳)群を42頭カウントした。N(西岳)群はカウントをできる機会に恵まれなかった。トレースできた9月の平均移動距離は0.83 km/day、平均移動高度差は250 m/day、10月にはそれだれ1.6 km/day、470 m/dayで、9月にくらべ10月の方が明らかに遊動が速かった。

無雪期の遊動域は、1986年まではN群しか出現しなかった西岳周辺にもY群が出現するようになり、Y群が東側に遊動域を広げていると考えられた。

このほか特筆すべきこととして、5月31日に明神上流1 kmの地点で融雪の為増水している梓川を泳いで渡る群れを観察した。群れは22頭全ても、7分の間に次々と飛び込み左岸から右岸に渡った。現場は、倒木などを伝っても水中を泳がなければ渡河が困難な地点であったが、アカンボを含む全ての個体が無事に河を渡りおえた。渡河直前の緊張感、渡河を終え全身ずぶ濡れになり、骨と皮だけのようになってヤナギ河畔林に逃げ込む姿は非常に印象的であった。

冷温帯におけるニホンザルの出産数変動モデルの検討

小金沢正昭(栃木県立博物館)

冷温帯に生息するニホンザルにとって、十数年に一度という不定期な豪雪は、繁殖とくに出産数に大きな影響を及ぼすと考えられる。1983-84年の冬季、栃木県日光地方は、20年来の豪雪に見舞われ、その後の出産数は大きく変動し、しかも減っては増える振動パターンを示している。そこで、この現象を解析するために、隔年出産を前提とした妊娠周期と交尾・出産・当才子の越冬までの過